

天明2年(1782)伊勢湾白子の湊を拠点とした廻船問屋の船頭、大黒屋光太夫は船員15名と神昌丸で紀州米を積み、白子から江戸に向け出帆するが、駿河湾沖で暴風に遭い7カ月も漂流、辿り着いたアリューシャン列島の一つアムチトカ島に漂着、そこから始まる立ちはだかる言葉の壁、異文化体験の衝撃、帰国を阻むロシアの思惑……。帝都ペテルブルグでついにエカテリーナ二世への直訴を果たし、10年ぶりに帰国した船頭・大黒屋光太夫らの数奇な・漂泊の物語。以前、大黒屋光太夫の10年にわたる旅を描いた井上靖の「おろしゃ国酔夢譚」を読んだことがあるが、史実に忠実とされる吉村昭の「大黒屋光太夫」(上下)新潮文庫を読んできた。



神昌丸：千石積の弁才船、船長約27m、高さ25m

の一本柱、乗組員：総勢16名

船頭：大黒屋光太夫(32才)身長173cm(大柄)

水夫頭：三五郎、65才

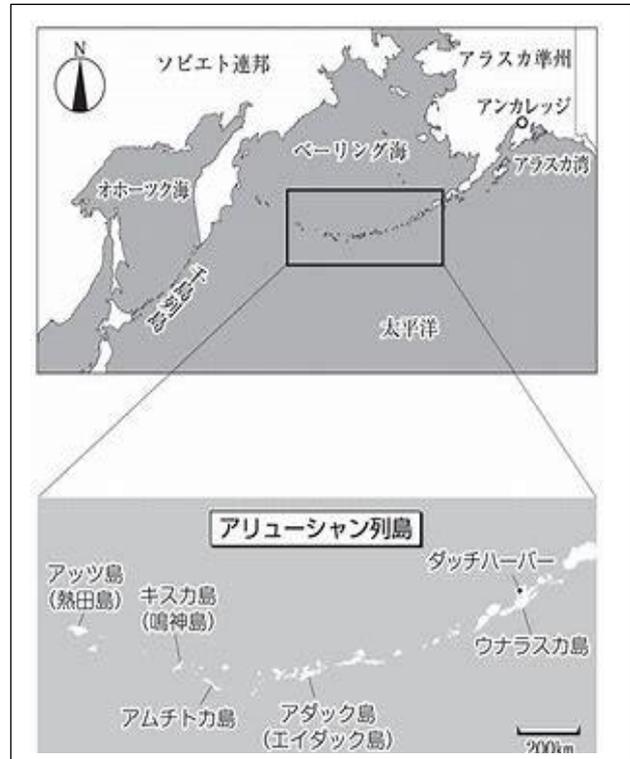
舵取り(航海士)次郎兵衛、36才

賄(事務長)小市

積み荷：御用米、250石、木綿、150石相当のマキ

船出：天明2年(1782)12月13日

駿河湾沖(遠州灘)の中ほどで大しけに遭う。12月25日、嵐は依然として止まず。1月15日、遠方に三原山見える。水不足のため酒樽を空にして雨水を集める。水夫1名死亡、数々の困難を経て天明3年(1783)7月20日、霧と風の島アムチトカ島の漂着(長さ約24km、横幅8kmの小島)。漂流した距離は直線で3700km。



アムチトカ島は先住民アリュート11人、毛皮・海獣狩のロシア人狩猟団60人ほどが住んでいた。彼らと暮らす中、光太夫はロシア語を習得。4年後、1787年、ありあわせの材料で造った船でロシア人とともに脱出を試みるも失敗。ロシア人を迎えるためにやって来た船が到着前に難破し漂流民が増えてしまった。

ここで光太夫等が逆に指導的立場にたって難破した船の材料を活用し脱出用の船を造った。

(アムチトカを含むアリューシャン列島がアメリカ領となったのは1867年、米ソが冷戦下にあった1965年、69年、71年と3回、アメリカは核実験として使用。ストロンチウムやセシウムなどの放射性物質汚染で死の島としてしまったため、現在は無人島となっている)

新造船の大きさは元の船の3分の1程度、1787年7月18日、ロシア側の乗船者は頭目以下25名、日本人光太夫以下9名。光太夫等は4年1カ月の孤島での生活にピリオドを打った。

8月23日、船はカムチャッカ半島のカムチャッカ川河口に到着、ここより約20kmほど川を遡り、カムチャ

ツッカ半島を統治する要塞ニジネカムチャーツクに到着。船着場には警備司令官が出迎えに出て来ていた。この出迎えはロシア側が日本との通商を開くことがロシアにとって、いまや切実な外交課題になっていたからであった。そこで、日本人9人に対し、今後一同は慈愛深きロシア帝国の皇帝エアカテリーナ二世の庇護の下に入る。生活の一切は保障されるので心配は要らないと申し渡された。それから川船上流のニジネカムチャーツクに向かった。そこは50~60軒ほどの集落で、司令官の自宅で歓待を受け1年弱滞在する。越冬は厳しく食糧も不足した。



1788年6月15日、光太夫等6人はイルクーツクに赴く司令官夫妻共にカムチャッカ半島を山越えには苦勞して西海岸のチギリスタの町に7月1日到着。同地の守備隊長も暖かく向かえてくれた。8月1日、光太夫ら6人はチギリスタの船着き場を發ちオホーツク海を越えオホーツクへ向け出港、1か月かかって8月31日、シベリア大陸西端の町オホーツクに入港した。オホーツクは家族数200軒程度の町であった。司令官に出迎えられ歓迎され今後の費用として光太夫へ銀錢30枚、その他5人には25枚支給された。オホーツクの町には12日間滞在し、9月12日、6人は帝室用の500頭近い輸送隊に身柄を付託され、ヤクーツクへ向かった。 **オホーツク~ヤクーツク間距離 約780km** オホーツクの町、現在人口3,333人の小さな港町。1731年頃まではロシア太平洋側第一の湊となっていた。歴史上様々な探検家がこの町を通った。

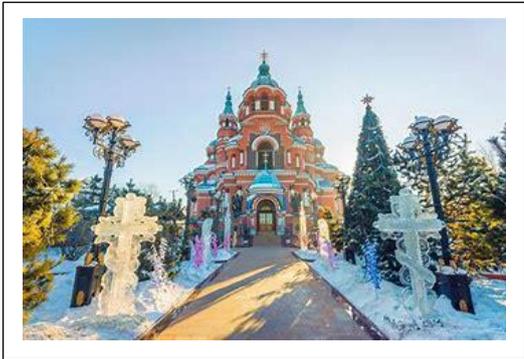


ヤクーツクはレナ河の河畔にあり北東シベリア第一の町。野宿が連続する旅程2ヶ月弱にわたる馬での旅。この間、難行の道中で庄蔵は足のできものを悪化させた。この地の長官はオホーツクと同額の銀錢を渡し、冬支度の旅装を購入せよとのことであった。同地での滞在は一か月余に及び、この世に、これほど寒いところがあったかと、みんな驚きであった。

1788年12月13日、帝室御用の輸送隊はヤクーツクを發つ。厳冬下、果てしないシベリアの雪原をひたすら西

への旅路の始まりであった。駅が数か所あったが無人の凍原が続くばかり、零下 40 度を超えるヤクーツクは厳冬であった。庄蔵の脚に脱疽菌が入り腐りだし、オリヨマの町に3泊した。

1789年2月9日、オホーツクから 2,486 km に及ぶシベリアの大雪原を走破した6人は帝室御用の輸送隊と共にイルクーツクへ到着した。同地はシベリア第一の都市、ロシア帝国の東方政策の中心地。帝都ペテルブルグに向かう街道に通じていた。



光太夫一行は総督府に出頭したが、あしらいはひどく冷淡であった。イルクーツク総督府の日本人漂流民に対する処遇・方針はロシアへの帰化、日本語教師とすることであった。庄蔵は脚を切断し以後、施療院で養われることになった、夏になり、先の帰国嘆願書がなんの音沙汰もないので再度提出した。返答があり、帰国をあきらめ、この国に仕官せよというものであったが、申し渡しには従えない旨伝えた。総督府からの支給金が減額されたが働ける者はアルバイトし蓄えもあった。冬がやって来た。庄蔵が洗礼を受けロシアに帰化

した。公太夫等以前のロシアの漂流民はすべて帰国することが出来なかったことを聞く。一行は暗い気分で1789年の暮を迎えた。



年が明け光明が射してきた。オホーツクで知り合いとなった男が訪ねて来た。日本に興味を抱いている著名な植物学者で、学問好きの女帝のおぼえがめでたいキリール・ラクスマンがこの地にいることを知り、キリールを訪ねる。キリールは歓迎し助力を約束。新たなる嘆願書を作成した。これも婉曲に拒否されたが、交際に広いキリールの紹介で日本との貿易に関心を持つ豪商シェレホス等との交際が始まる。1791年、正月、光太夫がキリールから嘆願書が国王の耳に達していないことを知る。幸いキリールが花木薬石を国王に届けるべしとの命を受けたので、貴殿も同行し直訴しようという話があり、同行することになった。

1月15日、キリールと光太夫は8頭立の馬橇で、キリールの四男、護衛、馭者を加えた5人。光太夫の費用はキリールが負担してくれた。新蔵については、病氣回復次第、キリールが命じた運送業者が後続させることにした。

光太夫等は途中、モスクワに一泊しただけで、5823 km をひた走り2月19日にペテルブルグへ到着した。(一昼夜、約200 km)。光太夫が見た帝都は壮麗な宮殿と寺院、多数の官庁が整然と並ぶ石の都、水の都、その人口は約20万人と伝えられる。ところが、強行軍の長旅の疲れがたたったのか、キリールは病臥の人となる。

光太夫は日夜付き添って介護に当たり、キリールとの信頼関係は以前にも増していく。5月に入りキリールの健康も回復、謁見工作も実り、5月28日、エカテリーナ二世陛下の謁見が許されるとの書簡がありキリールと共に参上、帰国の意思を伝えた。その後、光太夫は女帝のお召をたびたび受けた。女帝は日本の国情について質問されたが帰国のことについては語らなかつた。



光太夫に対する女帝の厚遇は破格のものだった。9月29日、日本人漂流民の帰国を許す旨の勅令が出た。日本人送還の使節はキリールの息子とする。光太夫、小市、磯吉を送還するが、ロシア正教に帰依した庄蔵、新蔵はイルクーツク日本語学校の教師とする。イルクーツクの第一級の商人たちを同乗させ、今後の日本の貿易に備えるというものであった。11月26日、キリールと光太夫は12頭立ての馬橇2台、荷物用の馬橇3台を連ねてペテルブルグを後にした。

その後、11月29日、モスクワ（12日間滞在）、観光しながら1792年1月23日、イルクーツクに到着、庄蔵と新蔵にと再会した。5月20日、イルクーツク出発。途中、豪商の面々が加わり、8月初旬、オホーツクに到着した。9月13日、キリールと永別。遣日使節団（団長はキリールの次男アダム・ラクスマン）はオホーツクを出港した。9月26日、エカテリーナ号は前方にエトロフ島を臨み、南千島の領域に入った。10月7日、船は根室湾に入り、何処とも知れない蝦夷地の海浜に到達、沖合に停泊した。（後日、現在の別海町と判明）。光太夫は蝦夷地へ到着した日をもって航海日誌の筆を折った。



別海町 上陸地点か



箱館奉行所



光太夫像 白子

当時の根室は蝦夷地を支配していた松前藩を經由して江戸の幕府にお伺いを立てる必要があった。その交渉に時間がかかり根室で越冬、その間最年長の小市（47才）が壊血病で死亡、日本側は官命を盾に根室から松前までの陸路を主張。ロシア側は海路による松前までを主張した。不毛な日々が続いたが、妥協案が成立、日本の廻船が絵柄（室蘭）まで先導し、絵柄からロシア人の主だった者だけが光太夫、磯吉を伴い陸路で松前まで赴くというものであった。またエカテリーナ号を江戸へ運航させないこと、国書を持参していないこと約束させられた。エカテリーナ号が根室を出港したのは1793年5月7日。6月6日に歓迎客で溢れる箱館に入港した。

17日、ロシア使節団と光太夫、磯吉は箱館を立ち松前に向かい20日、松前に到着。この後、3次にわたる日ロ外交交渉が行われ光太夫と磯吉は留め置かれた。第3回会談では長崎への入港を認めることが示されたが、ロシアに戻る事となった。老中松平定信は蝦夷地での交易をエトロフ島か国後島での交易を許す秘策があったと言われている。エカテリーナ号は7月16日、箱館を出港し、無事にオホーツクへ帰還した。くしくも、光太夫、磯吉も7月16日、松前の地を去っている。

江戸に戻った光太夫と磯吉は松平定信自らの聞き取りを受け光太夫は幕府の養い人という処遇を受けた。一般の人への国外での話は禁じられていたが、光太夫と磯吉は江戸番町の薬園に居宅を貰い平穏な毎日を送り、20年ぶりに故郷の伊勢白子に戻り母親にも会っている。

光太夫は文政11年（1828）4月15日、78歳で病没。磯吉は天保9年（1838）11月、75歳で病没。

光太夫と磯吉の脳裏にあったのは「17人で船出したが、帰って来たのはただ二人」ではなかろうか。 完